

少量土壌培地耕リンドウの切花本数を安定させる収穫方法			
【要約】 少量土壌培地耕のリンドウ‘ながの2号’と‘F1しなの3号’において、切花本数は定植2年目に最も多くなるが、3年目以降は減少する。定植3年目に切花長60cmで収穫し、切り下の茎葉を残すことで定植4年目まで切花本数を安定的に確保できる。			
農業技術振興センター・花・果樹研究部・花き係		【実施期間】 平成29年度～令和2年度	
【部会】 農産	【分野】 戦略的な生産振興	【予算区分】 県単	【成果分類】 指導

【背景・ねらい】

関西仏花や加工用組花の花材として、リンドウは盆、彼岸、年末時期に農産物直売所や花束加工業者からの需要が大きく、草丈は50cmあれば十分である。そこで、リンドウ‘ながの2号’と‘F1しなの3号’について少量土壌培地耕を用いて短茎で安定的に収穫できる技術について検討する。

【成果の内容・特徴】

- ①切花本数は、‘ながの2号’と‘F1しなの3号’ともに株元で収穫すると定植2年目で最も多くなり、3年目以降は減少傾向となる。特に定植4年目の‘F1しなの3号’では、2年目と比べて約6割の切花本数となる（図1）。
- ②切花長は、両品種とも定植3年目で最も長くなり、4年目で短くなる（図2）。
- ③定植3年目において切り花長60cmで収穫した場合、平均で‘ながの2号’では約30cm、‘F1しなの3号’では約60cmの長さの切り下茎葉が残っている（図2）。
- ④定植3年目において切花長60cmで収穫し切り下の茎葉を残すと、12月時点での芽数は、株元で収穫した場合よりも多い（図3）。
- ⑤定植3年目に切花長60cmで収穫すると株元収穫と比べて両品種とも翌年の切花本数は多くなり、特に‘F1しなの3号’では約2倍の切花本数が得られる（図4）。

【成果の活用面・留意点】

- ①この成果はガラス温室内の少量土壌培地耕による無整枝で栽培した定植2～4年目のリンドウの結果である。
- ②定植はプランター当たり6株植えて、定植1年目は株養成とし、収穫は2年目からとする。
- ③‘F1しなの3号’は、夏期の高温による障害花の発生抑制のために遮光が必要である（令和元年度主要研究成果より）。

[具体的データ]

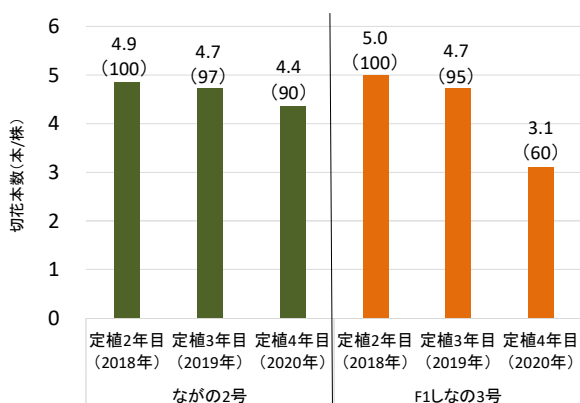


図1. 品種別、定植年次別の切花本数

- 注1) 定植日は2017年4月28日。施肥はOKF-1 2000倍希釈液 (EC0.5dS/m) を300ml/プランター・回で1~6回/日。収穫は全て株元からとした。
- 注2) 切花本数は、切花長50cm以上かつ着花段数4段以上のものを対象とした。
- 注3) 図中の数値は切花本数を、その下の()内の数値は品種ごとに定植2年目(2018年)を100とした比率を表す。

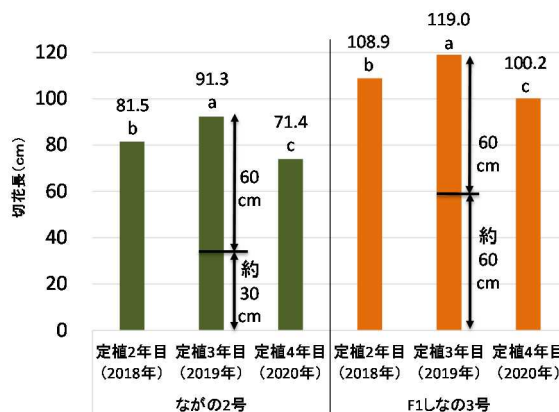


図2. 品種別、定植年次別の切花長

- 注1) 収穫は全て株元からとした。
- 注2) 図中の数値は切花長を表す。
- 注3) 切花長の数値の下の異なる英小文字間は品種ごとにTukeyの多重検定で有意差(5%水準)を示す。

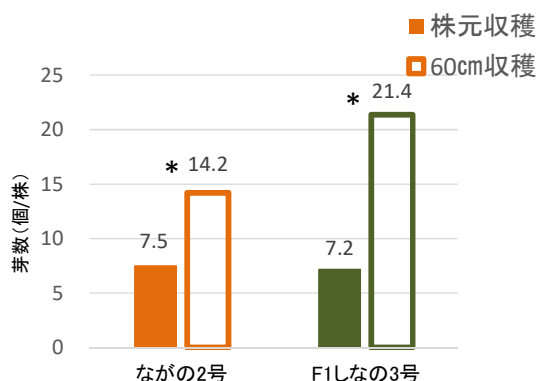


図3. 収穫位置の違いが芽数に及ぼす影響(2019年)

- 注1) 株元収穫は株元から収穫し、60cm収穫は切花長60cmの一定の長さで収穫した。
- 注2) 芽数の収穫後調査は2019年12月9日に実施した。
- 注3) 図中の棒グラフ上の数値は芽数を表す。
- 注4) 図中の棒グラフ間の*はt検定において5%水準で有意差があることを表す。

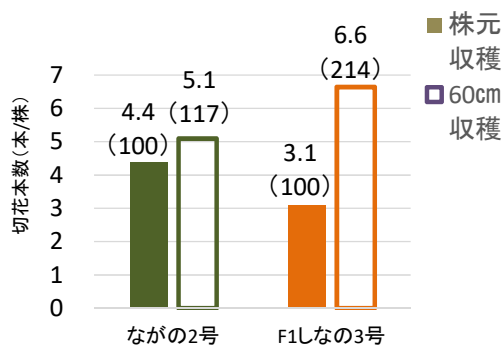


図4. 収穫位置の違いが翌年の切花本数に及ぼす影響(2020年)

- 注1) 収穫位置の違い(株元収穫と60cm収穫)は、前年の定植3年目の収穫時に実施したものであり、その方法は図3の注1)を参照。
- 注2) 切花本数は、切花長50cm以上かつ着花段数4段以上のものを対象とした。
- 注3) 図中の数値は切花本数を、その下の()内の数値は品種ごとに株元収穫を100とした比率を表す。

[その他]

・研究課題名

大課題名：戦略的な農畜水産物の生産振興に関する研究

中課題名：野菜等園芸作物や近江の茶の生産振興

小課題名：関西仏花および組花加工向け花材の栽培方法の確立

・研究担当者名：野 雄大 (R元~R2)、籠 洋 (H30~R2)、北村 治滋 (H29~H30)

・その他特記事項：令和2年度滋賀県園芸振興大会(花き部門)にて発表。